Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-25

安土城における『天主指図』の宝塔と吹き抜けの存在の可能性 : 五重塔の造形と宣教師の記録からの試論

原, 陽子

(Citation)
美術史論集,16:63-83

(Issue Date)
2016

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010475

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010475

安土城における『天主指図』の宝塔と吹き抜けの存在の可能性
―五重塔の造形と宣教師の記録からの試論―

原　陽子

《キーワード》塔、ヨーロッパの城、中庭、舎利、聖体、廟

はじめに

焼失した安土城の復元案は数多くある。内藤晶氏は一九六九年に自ら発見した静嘉堂文庫蔵の『天守指図』を池上右平による安土城天主の平面図写本と結論づけ、これと太田牛一の『信長公記』と自らの実測調査等をもとに膨大で綿密な構造計算をして地階に宝塔と、地階から地上三階までの合計四階分の巨大な吹き抜けのある画期的な復元案を発表した[1](図1)。平井良直氏は、六階の障壁画の『天守指図』の記述は絵画史的にはなんら矛盾はなく、その史料史的価値が疑問視される理由はないという論文と宝塔の存在を示唆する論文を発表している[2]。しかし宮上茂隆氏は『天守指図』を江戸時代の池上右平が作成した推定復原図あるいは創作であるとし、吹抜け空間は単なる思いつきとして、その史料的価値を否定している[3]。ところがすべての復元案に共通している五重塔のような造形がある。しかし先行研究では織田信長が安土城築城にあたり、何故この造形を居住空間でもある彼の城に採用したかについてはほとんど論じられていない。本稿では五重塔の造形についての考察のもと、宣教師の記録を参考に『天守指図』に記載されている吹抜けと宝塔の存在の可能性とその理由について推察する試論である。

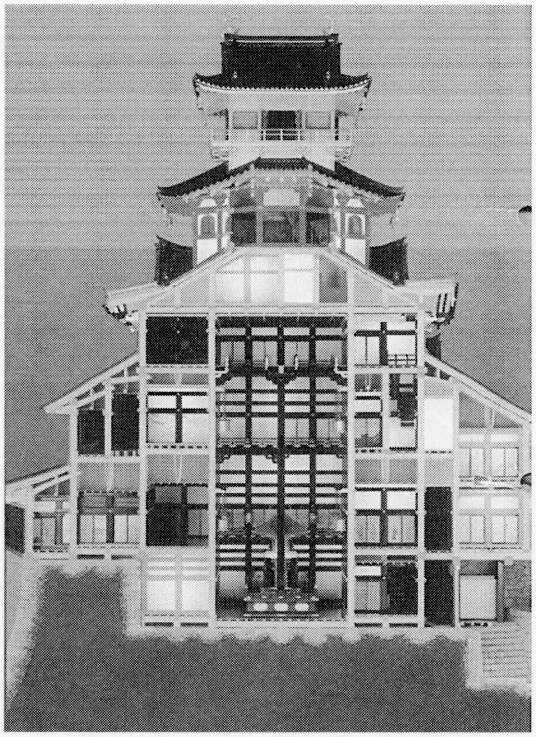

図1　内藤晶の復元案による1/20の安土城雛型　安土城郭資料館所蔵

一・五重塔

織田信長は尾張の一武将から天下統一を実現していくためにあらゆる手段を用いた。なかでも建築物や絵画・茶の湯・鷹狩・芸能を政治目的に利用する手法を信長の美術政策とすると、時代は百年ほど異なるが、同じく美術を最大限に活用し国家統一に邁進したカトリック両王の姿が重なる。ホアキン・ヤルサは彼の著書 *Los Reys Católicos. Paisaje artístico de una monarquía*『カトリック両王の芸術景観』[4]等で、カトリック両王は美術、特に建築を用い、国家統一に利用したと述べている。多くの人々が目にする建築物に彼らの政策を視覚化し、両王の権力をアピールしたのである。たとえ国王が不在でも、圧倒的な建築物の視覚効果は相変わらず絶大であるからだ。信長の建築物の利用の仕方はそっくりそのままこれにあてはまる。また、八百年かけてレコンキスタを完了していく中でスペインの王侯貴族は、それまで戦ってきた要塞城をあっさり放棄し、再征服した土地の最前線に新たな要塞城を築き次の再征服に挑んでいった。信長も、他の戦国大名とはちがい領国を支配下におくと、次の目標を実現するのに最適な地に城をつくり出陣していく。そして安土城が築城され、狩野永徳に描かせた《安土山図屏風》はイエズス会・東インド管区日本巡察師ヴァリニャーノと共に海を渡り、ヴァチカン内の「地誌廊」に展覧された。その反響は大きく、ウルバノ・モンテ（一五四四頃―一六一三）著の *La Prima Ambascieria Giapponese in Italia*『イタリア史上最初の日本使節』には、一五八九年の日本地図が折りこまれ、そこには安土という地名ではなく“NOBUNAGA”と記され、[5]この屏風と安土城そして信長の名は、西洋人に強いインパクトを与え長きに渡り記憶された。そして一五七七年から八二年までの宣教師の書簡類等に、安土城は「一種の塔」と表現されている。[6]

この「一種の塔」、そしてすべての復元案に共通し（図2）、しかも日本人には城の形として当たり前とされている五重塔のような造形はどこからきたのかをまず考察することにする。信長が南下玄興に命じ、城が完成した天正七年（一五七九）に成稿した「安土山ノ記」（妙心寺隣華院蔵の『特賜定慧円明南北国師虚白録』に所収）は、信長研究の一次資料である。その資料に「宝塔が林間に聳え立つさまは、遠寺晩鐘を描いたのかと疑うほどで、釣船がゆらゆらと蘆辺に浮かぶさまは、遠浦帰帆図かと見まがう」[7]という下りがある。この宝塔を内藤氏は、天主の形容に宝塔なる雅称を与え、『天守指図』が示す地階（石蔵中央に東向宝塔）を暗示して貴重としている[8]（図3）。宝塔は、宝の字を冠することで立派で敬うべきという意味を

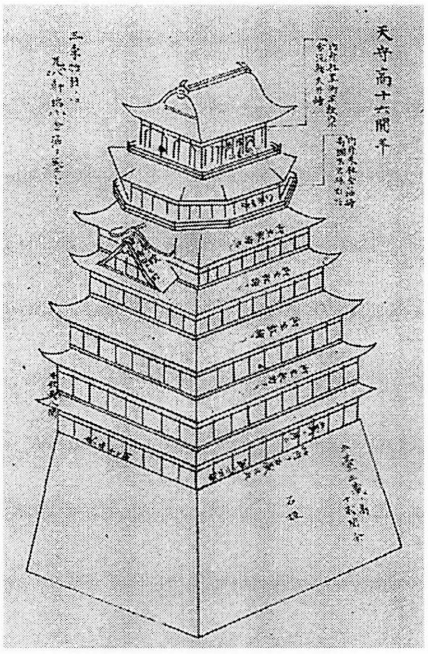

図2　最初の安土城天主復原案奥村得義作成―蓬左文庫蔵『金城温故録』1858年所収

加味した仏塔・舎利塔の美称である。仏塔の起源は釈迦の舎利を納めたインドのストゥーパで、さらに辿ると、紀元前五世紀頃からインドで偉人・聖人の遺骨を祀ったストゥーパを詣でた習慣にその起源があった。中国では、ストゥーパが古代の楼閣建築と合体して仏塔となり、その楼閣建築の頂部に象徴化されたストゥーパである相輪がのせられ、これが日本に伝わり五重塔となった。[9] それ故、日本の五重塔は楼閣式で形式的には多層宝塔（以下便宜上五重塔と呼ぶ）である。以上から南化の記した宝塔は安土城の望楼型天主を五重塔に譬えていると考えられる。[10]

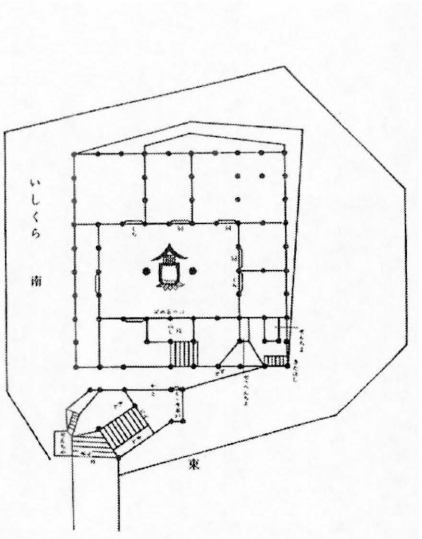

図３　池上右平による写本『天守指図』静嘉堂文庫蔵の地階平面図

二．信長の建築ブレーン：策彦と宣教師

信長は普請好きで、自ら指揮した建造物は岐阜城や安土城以外にも内裏の修理や将軍邸である二条新第の新営、自分の京都における二条居館等があり、そのうえ家臣造営の邸宅を見にいくことを楽しみにし、よく設計図を所望し気に入らないと手直しさせた。[11] こうした信長の安土城築城の建築ブレーンと考えられる人物として、明に滞在したことのある策彦周良及び安土城築城とほぼ同時期にミヤコで南蛮寺と安土城下にセミナリオ（図４）を建築していた宣教師が考えられる。



図４「安土セミナリオ図」
『グレゴリオ十三世一代記』所収

（一）策彦周良（一五〇一―一五七九）

〈中国建築への造詣〉

一五六八年に信長が将軍義昭を奉じて上洛した時、足利義満時代に明使節団が滞在した天龍寺・妙智院に禅僧・策彦周良（図５）がいた。彼はザビエルにはじめて山口での布教を許可した大内義隆に見込まれ二度も遣明使として明に渡り、北京では明帝・世宗に謁見し進貢した。それぞれの旅を『初渡集』と『再渡集』で記録してい



図5　《策彦周良像》
柯雨窓讃　京都 妙智院蔵　16世紀

る。牧田氏によると、信長は師・策彦を厚くもてなし、「真の善知識なりと感嘆し」深く帰依し、城に招いて中国の政治・人物・地理風土について聴き、また自ら妙智院に足を運んで終日道語・聞法したとあり、ふたりは度々会見し、終生交流をつづけた。[12] 宮上氏は天主の命名者を策彦とし、[13] 平井良直氏は「信長にもっとも文化的影響を及ぼした可能性のある人物」としている。[14]

南宋時代（一一二七―一二七九）には、禅宗が中国仏教界の主流で、特に寧波の天童寺と阿育王寺は禅宗五山という高い寺格が与えられ、日本からも多くの禅僧が参禅に訪れた。策彦は、阿育王塔信仰をもつ禅僧憧れの聖地・寧波で文人と親しく交わり、文人から贈られた書画が一括して現存する。その交流ぶりを示すひとつに《策彦帰朝図》（京都妙智院蔵）がある。寧波の阿育王寺は、古代インドの阿育王・アショカ王が釈迦の遺骨を納めて造立した八万四千基の仏舎利塔のひとつが三世紀に地中より涌出した場所とされている。七世紀には皇帝が舎利を得ることは善因と説かれ（『法苑珠林』巻三十八）、隋の文帝が建立した舎利塔の地宮に舎利が埋納された（『法苑珠林』巻四十）。唐時代には則天武后が自らを阿育王に重ね合わせ、聖王だけが造塔活動が出来るという信仰に突き動かされ、全国に大雲寺を建立して自らの治政を天命とする偽経『大雲経』を安置した。こうして舎利が国土を守護するという信仰が定着し、寺の舎利塔は護国の象徴的存在となった。そして阿育王寺の仏舎利は歴代の皇帝から崇拝を集め続けることになる。[15] 策彦に先立つこと約七十年前の一四六七年に、相国寺で修業した禅僧・雪舟等楊（一四二〇―一五〇六）は遣明使の一行として寧波に入港し、栄西や道元が禅を学んだ日本禅宗の淵源である天童寺に参禅し、寧波の風景を写したスケッチを模本の形で数枚残している（図6）。信長も塔が聳えるこのような絵を見たにちがいない。また策彦の著作『駅程録』には、寧波より北京までの駅名・里程を記し、かつ名勝・風物も記録している。そしてとりわけ建築物には深い関心をもち、沿途の名刹を多く訪ね、堂宇伽藍の様子、安置された仏像名や扁額類にいたるまで丹念に記録したとある。策彦が実見した建築物のなかでとりわけ、七層の三層まで自ら登った蘇州の虎丘塔（図7）や杭州の西湖周辺の勝景と八角十三層の六和塔（図8）等は、後述するが信長に影響を与えたと考えられる。[16]

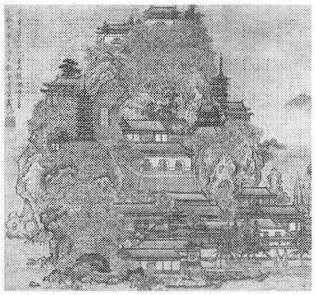

図6　雪舟等楊《金山寺・育王山図》の模本
個人蔵

内藤栄氏によると、日本で大きな信仰を集めた舎利として、空海請来の「東寺舎利」、鑑真請来の「唐招提寺舎利」、二歳の聖徳太子の掌からこぼれ出たという「南無仏舎利」、そして阿育王塔信仰がある。鑑真は寧波で阿

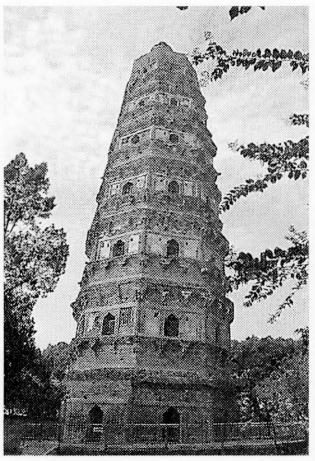

図7　策彦が三層まで登った蘇州の虎丘塔

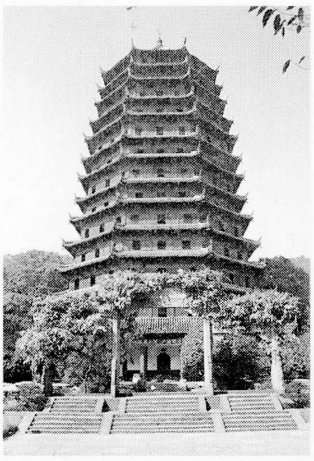

図8　杭州の八角十三層の六和塔

育王塔を礼拝し日本に天台宗を伝え、平安時代には天台山に近い阿育王寺舎利は天台僧を中心に信奉された。そして中国皇帝が威信をかけて開版した一括の漢訳経典・宋版一切経が日本に輸入されるようになると、これを所有することが権威のひとつとなる。藤原道長による金峯山埋納（一〇〇七年）は経塚造営の濫觴とされ、法華経等を法舎利として山岳信仰の聖地の土中へ埋納した。これは呉越・北宋の舎利塔地宮への埋納と同様の意図があるとされた。院政期になると、白河法皇は、寧波の阿育王寺等から二千粒の舎利を請来したとされ、阿育王を意識して頻繁に数万基に及ぶ小塔を造立し、法勝寺で盛大な供養をして権威を高めた。俊乗坊重源は三度渡宋し、阿育王寺の舎利殿の復興に際して、後白河法皇を実質的なパトロンとし周防国の木材を送り援助した。そして東大寺大仏をはじめ自ら携わった仏像の胎内に舎利を籠め、護国を舎利に託した。仏舎利がもともと阿育王寺舎利を受け継ぐとして権威づけられ、後白河院が積極的に熱狂的に推進した。[17] 当然、信長は策彦から持ち帰った資料をもとにこの舎利信仰の流れや法舎利としての法華経等が舎利に代わるもので、そういう舎利が地宮に納められたことも見聞したと推察される。

〈策彦の日本建築への造詣〉

一方、策彦は室町幕府足利将軍の管領細川家の家老井上宗信の第三子で、五山の禅僧としての教養を身につけた文人でもあり、狩野永徳筆《二十四孝図屏風》（福岡市博物館蔵）の讃者でもある。[18] 信長は足利将軍家の菩提寺・等持院を寓居とし、銀閣を鷹狩の休憩所とし、さらに義満が氏寺として造営した相国寺には、天正二年（一五七四）という安土城築城計画期に寄宿し、茶会も催している。内藤氏や宮上氏が安土城の最上階のモデルとする金閣寺と銀閣寺は相国寺の境外塔頭である。義満は内裏においては上皇並みの礼遇を受け、政庁であり宮殿である北山第の中心には紫宸殿を配置し、天皇家を凌ぐ政治的権威と宗教的権威を北山第と相国寺で示した。相国寺に建造した古今未曾有の高さを誇る百十メートルの七重大塔を北山第に移築し、明皇帝からの使節に日本の最高権力者がだれかが分かるように演出した。[19] 信長が上杉謙信に贈った《洛中洛外図屏風》の花の御所は、焼失する前の相国寺の七重塔から描いた粉本によるという。[20] これを描いた絵師は狩野永徳で、のちに《安土山図屏風》を描くことになることからも、信長は上層へ登れる相国寺の七重塔を認識していたと推察できる。

この七重塔のモデルになったのが、法勝寺の約八十一メートルの巨大な八角九重塔である。これは革新的な院政を創出した白河天皇が建立（一〇八一年）した。『明月記』には「鎮護国家の道場、内

外無双の塔」とあり、『愚管抄』が国家的な強大な意識をもりこんだ国王の氏寺と表現している。鎮護国家のために聖武天皇が造営した東大寺を意識しながら、律令制や摂関制に固執しない新しい自由な権力機構として、白河法皇があみだした院政の象徴といえる塔であった。この塔には「登れば鷲や鷹の飛翔と同じく仰ぎ、見下ろせば飛ぶ鳥がみえる」（『朝野群載』巻第二所収「法勝寺御塔供養呪願文」）との記録が残され、さらには「嘉永元年、盗賊が九重塔に侵入し、五重あたりから現れた」という記述や、「儀式でも、九重の各重に僧侶が登り、散華したらしい」とあり、登ることが出来た。[21]発掘調査の結果、八角の基壇の遺構（図9）が岡崎の京都市動物園内に存在することがわかり、富島義幸氏により復元図が作成されている（図10、11）。この義満と白河法皇のふたつの塔は現存しないので研究対象にされることが少ないが重要である。

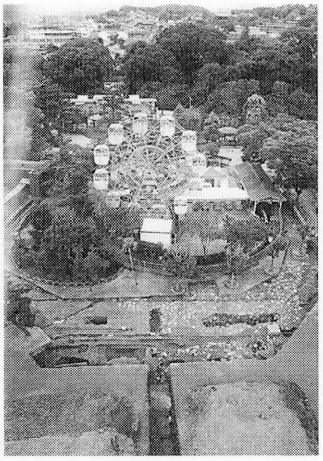

図9　法勝寺跡　京都市動物園内遺構

また都に入ると一番先に目に入る平安京鎮護のため建立された東寺の五重塔を、信長は落雷前の姿、つまりフロイスの記述と同じ姿で、信長は二十六歳（一五五九年）の初上洛のときに見たはずで、二回目の上洛時には東寺に陣をしいた。更に時代を遡れば現存しないが、東大寺にも東西二基の七重塔（約百メートル）、さらに百済大寺には九重塔があった。中国の仏教政策の流れをくむこの官大寺の伽藍造営こそが、大和国家の巨墳にも比較しえる国家権力の象徴であった。[22]そして節目となる時代の新しい政治構想を創出した権力者により、鎮護国家の象徴である五重塔が伽藍のなかでも遠くから見てもひと目で分かるランドマークとして建造されていった。彼らと同じように新しい時代を切り拓こうとしていた信長が、都や大坂・奈良に入ると一番先に目にはいった五重塔を天下静謐・天下布武の象徴として、安土城築城の基本構想の支柱に選択したと推察できる。

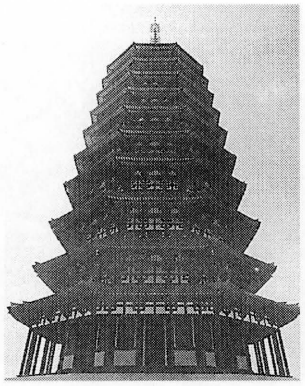

図11　法勝寺八角九重塔　2011復元近景CG

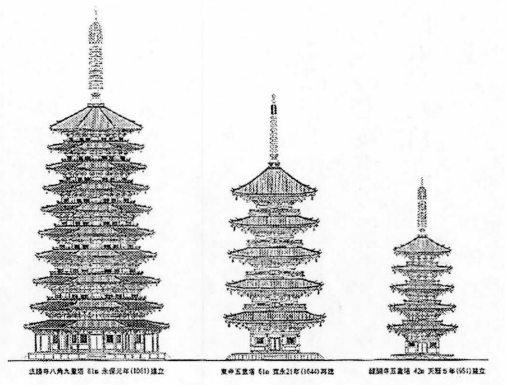

図10　法勝寺八角九重塔・81m　冨島義幸作成復元立面図。東寺五重塔61m・醍醐寺五重塔42m

（二）宣教師からの情報

次に宣教師から得た情報を考察する。現役のイエズス会宣教師で日本美術の研究者であるガルシア・グティエレスによると、「信長はイエズス会士を友好的に厚遇したので、宣教師たちはヨーロッパの壮大な城郭のスケッチを見せた、そこから信長は安土城の着想を

得た」とその著書で述べている。[23] 内藤氏が西洋建築の影響を述べているが、その考察を裏付ける明確な資料は発見されていない。グティエレスはそれ以上の詳細を述べていないものの、西洋側の研究者による記述として貴重である。藤岡通夫氏は『城と書院』（小学館、昭和五十七年一六三頁）で、「日本の近世の城と西洋の中世の城との類似について説かれたものがある」としている。また宣教師や南蛮人のなかには少なからず建築に関心を示した者がいる。宣教師ヴィレラは石清水八幡宮を、サンティアゴ・デ・コンポステラと同じ戦の守護神と報告し、修道士アルメイダは興福寺をベレン修道院と同じ規模とし、元フィリピン総督で、難波して日本沿岸にたどり着いたロドリーゴ・デ・ビベーロが、「タイコウサマの墓」をトレド大聖堂や、グワダルーペ修道院、アランフエス宮殿と具体的な建築名で比較して報告している。[24] イタリアではファルネーゼ枢機卿が、ヴィニョーラに改造させたカプラローラ城塞宮殿の「世界地図の間」の天井に小さい島「日本」を描かせ、ここを教皇庁の世界布教会議の場とした時代である。この「地図の間」に触発され、一五八〇―八三年にヴァチカン宮殿に世界各地の地図や都市図を描いた「地誌廊」ができ、その陳列館に二年二か月かけて到着した信長の《安土山図屏風》が展示されていたのである。[25] これを考えると宣教師を含めた南蛮人のだれかが、信長に具体的な建築名で西洋建築について語ったと推察できる。また天正遣欧少年使節が持ち帰った書物に世界の主要都市の描写がある。[26] これに基づく江戸初期の作とされる《四都図・世界図屏風》には高く壮麗な塔が数々描かれ、セビリア図にはスロープを馬で上れたヒラルダの塔が中央に高く聳えている（図12）。しかもこのうちのローマ図は、イエズス会創立者である『福者イグナチオ・デ・ロヨラ伝』（一六一〇年）所収の都市図によっている。[27] インドのゴアでは一五一〇年に、リスボンをモデルにした西洋風の市街地を総督アルブケルケが建設している。[28] 来日した宣教師たちは、すでに各地でポルトガルが建設した都市を見聞しており、少し後のものになるが、ペドロ・デ・ラ・クルスの書簡に「日本にポルトガル人の都市を建設する利点について」という項もある。[29] こういうことから、信長は高い塔が城郭になり居住宮殿にもなることを宣教師から学習し、日本にある最も高い壮麗な建築物である五重塔を視野に入れたと考えられる。

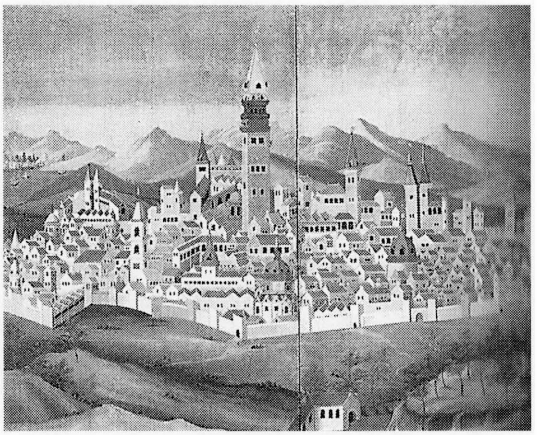

図12 《四都図・世界図屏風》のセビリアの部分

三．五重塔の構造的居住空間としての可能性

そこで五重塔は居住空間として構造的に登ることは可能かを考察する。楼閣を積み上げていく五重塔の工法では、心柱を構造上必要とはしない。心柱は相輪を支えるためにあり、日光東照宮では心柱を鎖で吊り下げている。構造的には床を張らずに吹抜けにすること

は不可能ではなかった。さらに注目点は、先述したように策彦が中国で「虎丘塔の三層まで登っている」ことである。中国の仏塔の特徴は最上層まで階段があり人が登れたことで、応県の木塔・仏宮寺釈迦塔は各層に床・階段が設けられ、縁に出ることもできた。(図13)。また中国の早い時期の仏塔は見張り塔であり階段で登れたのである。日本の五重塔は、「外観だけで、内部は初重しか造られず、楼閣建築の要素はなく、仏舎利を祀る聖なる建築として終始してきた」が建築史の通説であり、「階段がなく修理以外には登れない」とされている。[30] しかしフロイスは「東寺はミナレテのようで廻り階段で登った」と書いている。[31] つまり登れたのである。信長もこの東寺の五重塔を前述のように見ている。要するに、ミナレットであったセビリアのヒラルダの塔や、カプラローラ宮殿のようにくるくる廻って登れたのである。

さらに日本の記録でも上層へ登れる階段を設置していたと確認できる塔が東寺以外に少なくとも三つある。その二つは、先述した法勝寺の八角九重塔と相国寺の九重塔で、三つ目は法観寺の五重塔(通称八坂塔)である。足利尊氏は南朝に対抗し室町政権の存在価値を誇示するステイタス・シンボルとして、また軍略上の拠点として全国に一寺(安国寺)と一塔(利生塔)の建設に着手し、十年間ですべてを竣工させた。寺は屯営基地に転用でき、塔には物見の機能をもたせた。八坂塔の最上層には明治の頃まで物見台があり、京都を展望することも出来たという。[32] これで『天守指図』の五階・八角の段から六階に登る階段、つまり内藤氏が復元した朱塗りの階段の絶妙な廻り方が納得できる(図14)。内藤氏も「天守の階段の納まりは一般的に極めて難しいが、本指図には技術的必然性が認められ、指図の信憑性度を推し量る大きな指標である」と記している。[33] 要するに心柱と階段そして床の設置の可否は、造営主次第で構造的には可能であった。

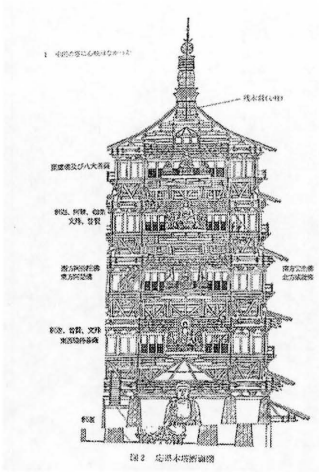

図13　応県の仏宮寺釈迦塔

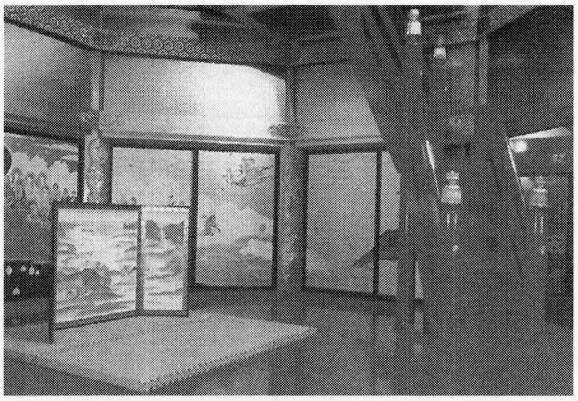

図14　セビリア万博出展のため内藤氏復元案により再現された原寸大の五階八角の段

四.『天守指図』の吹抜け

建築大辞典(彰国社　昭和五十一年)と『建築学用語辞典』(日本建築学会　岩波書店一九九三年)によると、「吹き抜け」は「床の一部または全部を開口し、二層以上の階を垂直において、連続する空間」と、「吹き放ち」という「建物における外部と内部の境界に、固定された遮蔽物をおかず、外部と連続させてつくられた部分」の意味に使われるとある。つまり、「吹き抜け」にはドームのような

天井が高い垂直的な開放的空間と、もうひとつ回廊のような外部に開放的な横に広がる水平的な「吹き放ち」のふたつの意味があることが分かる。内藤氏は、『天守指図』の吹き抜けについて西洋宗教建築の高い天井の空間をイメージしている。しかし、村井貞勝の天主内部見学は、『天守指図』の座敷に符号をつけてたどると、吹き抜け空間をめぐる座敷を格式順におこなっているとし、『信長公記』も間接的に吹き抜け空間の存在を示していると指摘している。[34] これは修道院の中庭空間の周囲に巡らされた部屋の空間構成のようで、中庭に向かって開放的で水平的な「吹き放ち」がイメージできる。これについて考察してみる。

（一）中庭に向かって吹き放たれた空間

前述のスペイン人ガルシア・グティエレスは、宣教師が「西洋の壮大な城郭」のスケッチを信長に見せたとしている。当時のスペインの要塞城や城館の多くは、天然の要害にさらに石組みをし、迷路のような道、外枡形の出入口、屋上に鋸歯狭間（図15）、壁面に多様な狭間（図16、17、18）や、matacán（石落し）、aljibe（イスラム人が持ち込んだ地下に雨水を貯水する装置）があり、地下に厩舎、蔵、氷室、地下道を設置したものもあった。そして城で最も壮麗な塔には領主の居館があり、螺旋階段があったのである。ザビエルが生まれたハビエル城（図19）やイサベル女王が王位継承宣言をしたセゴビア城もそうであった（図20）。その一方でフランソワ一世が幽閉途上で滞在したインファンタード公爵宮殿（図21）には、最上層に五重塔の回縁のように外部に向けて開放された華麗な回廊が出現していた。信長はこれらの要素のいくつかを、とりわけ城郭で最も壮麗な塔のイメージを安土城で採用した可能性は否定できないのではないか。そして本論としては何よりもpatio（中庭）が重要な構成要素であった。マンサナーレス城（図22）やコカ城（図23、24）が分かりやすいが、周囲を城壁で囲みその四隅に塔をたて、そして城壁にそってまたは城壁内に吹き抜けの中庭をつくり、それを囲んだ四面に部屋を配置した城郭を建造した。修道院にも中庭を囲む部屋からなるclaustro（中庭回廊）がある。イサベル女王が誕生したマドリガル・デ・ラス・アルタス・トレス宮殿にある王族子女用の木造の小修道院にも中庭がある[35]（図25）。イベリア半島では七一一年にイスラム人が侵攻し、その後約八百年間イスラム文化と共存した結果イスラム建築の影響が色濃く、聖俗を問わずほぼすべての建造物に中庭があると考えていい。中庭は通常吹き放ちで覆いはないが、覆いがあってもなくても中庭であることには変わりはない。A・ヒロンの記録から平面図が読める信長は、その構造を簡単なスケッチで理解できたのではないか。地球が丸いことを即座に理解した信長である。日本の寺院の回廊をイメージすると分かりやすい。古代の楼閣式建築である五重塔は積み重ね方式で、塔身と屋根からなるユニットを幾層にも積み上げて建造する[36]。発想を逆転して、楼閣の四面の回縁を建物内部に取り込み、その中央にスペインの城郭の中庭を配した箱を積み上げていくと、箱の中央が空洞・吹き抜けとなり、その四面に部屋を配置することで内部に向けて回縁のある吹抜けができることを信長は着想したのではないか。そうすれば、安土山頂の狭い敷地でも内裏や将軍御所で見た部屋のほぼすべてを

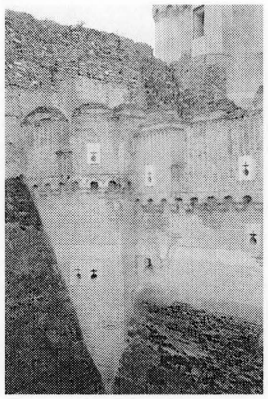

図 17　コカ城の狭間・銃眼 筆者撮影

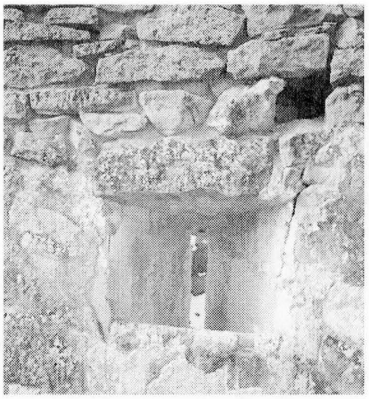

図 16　ベルランガ・デ・ドゥエロ要塞城の狭間：手前を大きく敵側を小さく刳り抜いた形。日本の城のものと同形。筆者撮影

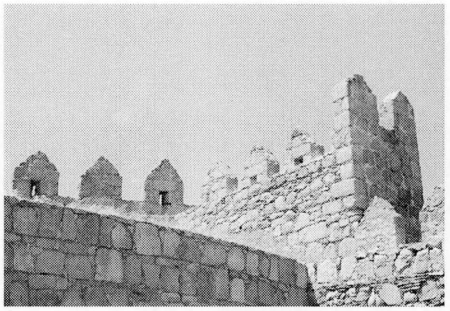

図 15　アビラの城壁の鋸歯狭間：鋸歯の中央を長方形に刳り抜いた二重の狭間。筆者撮影

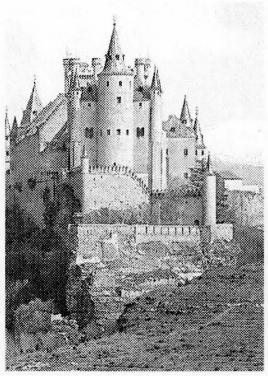

図 20　セゴビア城：イサベル女王が王位継承を宣言した城



図 19　ザビエル城：聖フランシスコ・ザビエルが生まれた城。筆者撮影

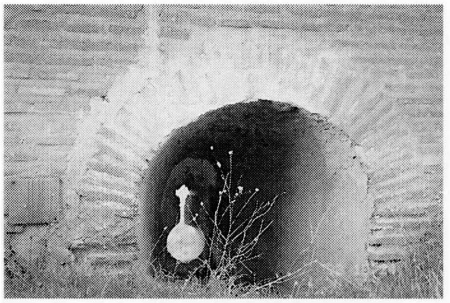

図 18　モタ城の狭間：上部が十字形で下部が円形。筆者撮影

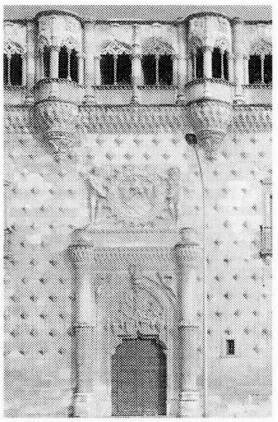

図 21　インファンタード公爵宮殿の華麗な回廊

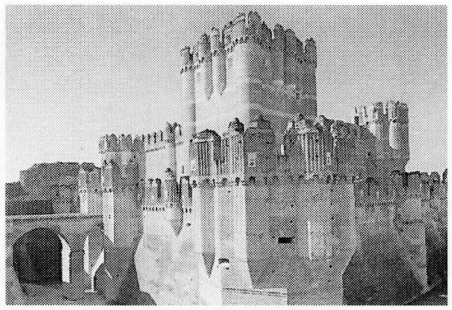

図 23　コカ城：15 世紀末にアラブ人建築家により建造、ムデハル様式の要塞城では最重要

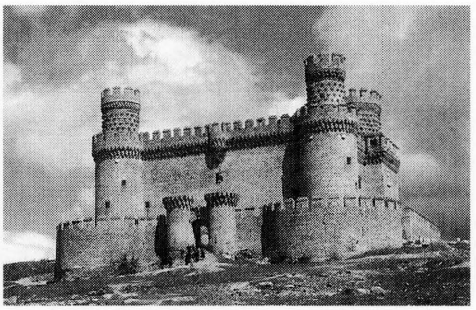

図 22　マンサナーレス城：四隅に塔、城壁が二重、中央に中庭。

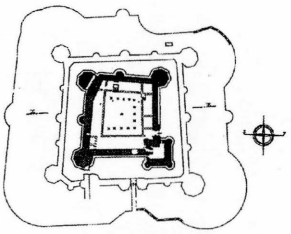

図 24　コカ城の平面図：四隅に塔・城壁が二重・中央に中庭

垂直に積み重ねることができ、千鳥破風の屋根も含めて政庁や居住空間が壮麗な五重塔内におさまり、しかも白河上皇や足利将軍（図26）を凌駕する独創的な建造物になると認識したのではないか。信長は安土城下に建設を許可した修道院をも自らの栄華を示すために最上のものにすることを望み、壮麗で宏大なものにしてもらいたいと何度もヴァリニャーノに話をもちかけている。[37] 安土セミナリオの内部にも中庭が存在した可能性も否定できないのではないか。以上から中庭も吹き抜けの存在の可能性を示唆する理由のひとつと考えたい。

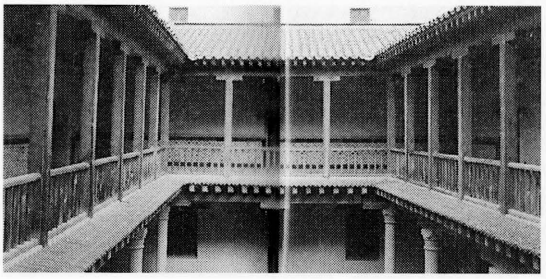

図25　マドリガル・デ・ラス・アルタス・トレス宮殿の木造小修道院の中庭

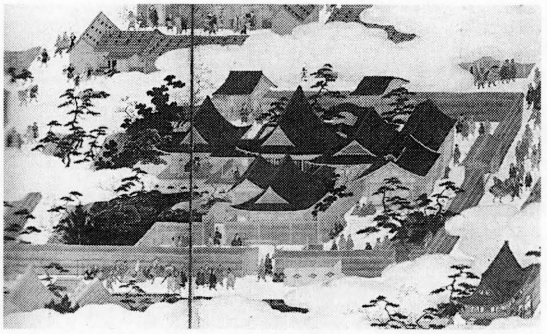

図26　《洛中洛外図屏風》にみる足利将軍邸
米沢市立上杉博物館

（二）天井が高い吹抜け空間

そして勿論重要なのは、天井が高いドームをもつ宗教建築である。信長が足利義昭を擁し上洛した年である一五六八年のローマで、イル・ジェズ聖堂（イエズス会の本山）の建設が開始された。この会のパトロンで資金提供者であるアレッサンドロ・ファルネーゼ枢機卿と、第三代総長のスペイン人であるフランシスコ・デ・ボルハ[38]が議論の末、最終的にはヴィニョーラによる設計が採用された。イエズス会側の要望はカトリック改革対策として、布教のための機能を最優先にした二点であった。ひとつは、単廊式ラテン十字プランとすること。それは説教や司式がし易く、多数の信者が祈り易い、シンプルでオープンな空間にし、従来の側廊を排し、両側に小礼拝堂を連ねるものであった（図27）。要望の二つ目は、説教僧の声が信徒によく聴こえる平天井にすることである。しかしファルネーゼは、古典の理念を再現した天井が高い壮大な吹き抜け空間のある、優美で荘厳な円天井の採用を強行した。そしてこの両者の意見を融合した単廊式ラテン十字プランと交差部に円天井という二点が、その後の西洋教会に大きな影響を与え、中南米、東洋諸地域のイエズス会教会でも踏襲されていく。[39]

そしてローマでは荒廃していたサン・ピエトロ大聖堂の

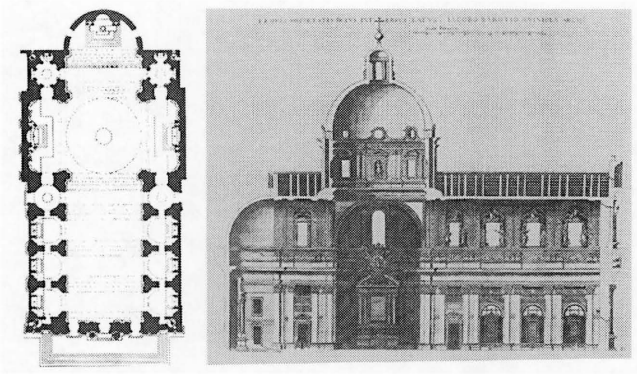

図27　ローマのイル・ジェス教会の平面図：単身廊ラテン十字プラン

新聖堂造営が始まり、イエズス会様式をふまえつつミケランジェロの設計になる巨大な吹き抜けのあるクーポラが完成しつつあった。さらにスペイン帝国を継いだフェリペ二世（在位一五五六―一五九八）が、一五六一年にトレドからマドリッドに首都を移し、ミケランジェロの弟子であるファン・バウティスタ・デ・トレドを設計者とし、ローマの大聖堂を模したエル・エスコリアル宮殿を一五六三年に着工し一五八三年に完成させた（図28）。そしてプロテスタントに対抗するカトリック改革の牙城としたこともヨーロッパで大評判になっていた。その竣工二か月後に天正少年使節が招かれている。これは王の居住空間である王宮、政庁、霊廟、教会、修道院、神学校、図書館等を兼ね備えた巨大複合建築で、大小合わせて十六の中庭があり、中庭を取り囲み部屋がある四角形を幾重にも組み合わせて構成されている。[40] またこれに先駆け、彼の曾祖父であるフェルナンド王は、一四九二年にグラナダを奪還してレコンキスタを完了した勝利宣言として、サラゴサのイスラム宮殿であったラ・アルハフェリア宮殿を大改造して、八十二もの高窓のある巨大な吹き抜けの大広間をつくった。そして貴婦人と奏楽士のための二階廊を設置し、格天井を国家の永遠の繁栄を願って「松毬」、「柘榴」、そしてカトリック両王の紋章で数限りなく装飾した（図29）。こうして建築物を利用して君主としての力を内外に誇示し、ドイツ人・ミュンツァーの『旅行記』に記されることで評判となっていた。[41] また慶長遣欧使節を迎えたフェリペ三世の寵臣・初代レルマ公が、フランシスコ・デ・モラに設計させ造営したレルマ公爵宮殿にも巨大な吹き抜け空間がある。

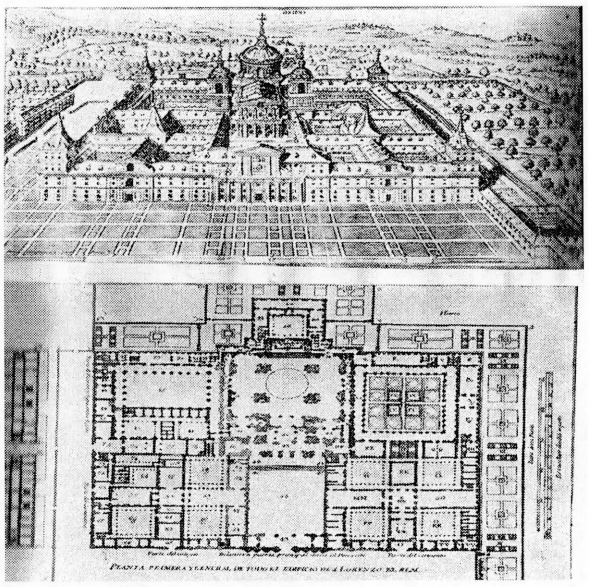

図28　エル・エスコリアル宮殿全容と一階の平面図：聖ロレンソの焼網から着想した中庭を組わせた構成

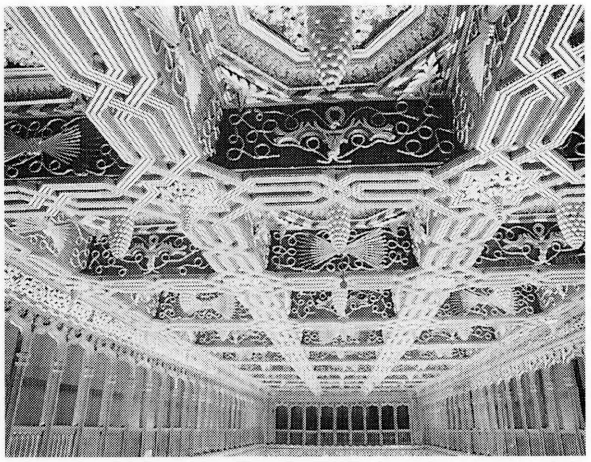

図29　ラ・アルハフェリア宮殿の巨大な吹き抜け空間と両王の紋章を配した格天井

同じ頃、総長のフランシスコ・デ・ボルハが創設に関わったローマ学院ではヴァリニャーノと、のちに第四代総長となるアクアヴィーヴァが修行していた。ヴァリニャーノやオルガンティーノはイル・ジェズ聖堂の設計過程を身近で見聞し、イエズス会様式の

教会建築造営が一五六八年から各地で始まるという情報を熟知した上で来日したはずである。信長は一五八二年に亡くなるまでの十四年間に、都で十五回、安土で十二回、その他の場所で三十一回以上、少なくとも約六十回宣教師と会い[42]、その間に西洋の城郭や聖堂の壮麗な高層建築物の構造を学習していったと思われる。信長が都での教会建設を許可した南蛮寺は安土城築城とほぼ同時進行で建設され、その出来栄えを褒めた。設計者であるオルガンティーノは建築費には糸目を付けずに都にローマ・バジリカ風の壮麗な教会を建てたいと考えたのは当然で、イル・ジェズ聖堂を指しているとしていいだろう[43]。さらにG・グティエレスは、少年使節が持ち帰った前述の二冊の書物が、南蛮屏風を制作することになる日本の画家に着想を与えたと書いている。信長であればなおさらのこと、中庭や吹き抜けを取り込めば壮麗な複合施設が可能であると触発されたとしていいのではないか。

五.『天守指図』の宝塔

近年の安土城の発掘調査結果から心礎にあたる地点には礎石はなく穴は確認されているものの、舎利や『天守指図』の宝塔の有無については結論が出ていない[44]。五重塔は元来、仏の舎利を納めた舎利殿である。内藤氏と宮上氏は安土城の最上階は舎利殿である金閣・銀閣がモデルであるとしている。この手本となったのが西芳寺舎利殿で、その庭園を信長は策彦に修復させている。

一方キリスト教会は、尖塔やドームが高く聳える高層建築物で、その吹き抜けの大空間の祭壇に最重要なものとして聖体が祀られている。折しも十六世紀のカトリック世界では、プロテスタントに対抗するためトリエント公会議が開催され、「聖体の秘跡」が再確認された。ポルトガル語で仏塔は、la pagoda budista であるが、G・グティエレスによると、"pagoda"という語はサンスクリット語のインドのストゥーパに該当するセイロン語の"dagoba"からポルトガル人が造語したとしている[45]。宣教師は日本より先にインドで布教活動をしていたので、釈迦の舎利がキリストの聖体と同じく重要なものであること、また五重塔の原型であるストゥーパについても十分に理解していたことは留意しておく必要がある。北野天満宮を訪れた宣教師ガスパル・ヴィレラの一五七一年の書簡には、「聖体をしまっておくときの私たちの場合と同じように、階段のついた真っ黒で、暗く、非常に古い祭壇があるのが見えました。」とある[46]。《聖母十五玄義図》（原田本）（京都大学総合図書館）（図30）ではロヨラ像とザビエル像の間の中央に聖体が描かれている。高槻で催された盛大な復活祭ではヴァリニャーノ巡察師は十字架の聖体顕示台をもって進んだ[47]。《南蛮屏風》（狩野内膳筆・神戸市立博物館蔵）（図31）に描かれた教会の内部で神父は聖体を捧げ持ち、屋根には聖体顕示台（図32）に似た十字架がある。その中央に円いガラスが嵌め込まれている。これはイサベル女王が改修させたトレド大聖堂の聖体顕示台の中央にある聖体を納めたガラスと同じ円形である[48]（図33）。また聖体顕示台と日本の舎利容器は形体もガラス部分も似ている（図34）。こういうことから宣教師がいかに聖体の重要性を説いたか、信長も宣教師も聖体と舎利が同じ価値をもつものと認識して



図30 《聖母十五玄義図》原田本　京都大学総合博物館



図31 狩野内膳《南蛮屏風》神戸市立博物館

いたであろうことが分かるだろう。[49]舎利は国家護持と五穀豊穣を目的とする修法の本尊である。[50]天下静謐を目標にする信長には不可欠と推察される。要するに舎利あってこその五重塔であり、聖体あってこその教会である。

しかも時代の経過とともに舎利そのもの、そして舎利信仰が変化していく。インドの舎利信仰は、舎利を埋納した仏塔供養から、舎利を納めた舎利容器を直接供養する舎利容器供養となり、[51]さらに日本では真正の釈迦の舎利は数に限りがあるため、安置物は舎利から宝玉類や能作性宝珠、また法舎利と呼ばれる経典・仏像の安置へと変化し、さらに塔の性格が大きく変化し、釈迦の墓に源を発している塔の下に天皇の遺骨や遺骸が祀られるようになる。十二世紀には、白河上皇が鳥羽成菩提院三重塔への遺骨安置を遺言し、生前からこの塔を墓所とする考えがあった。これは白河上皇が釈迦にならぶ宗教的位置をもったともいえる。[52]現

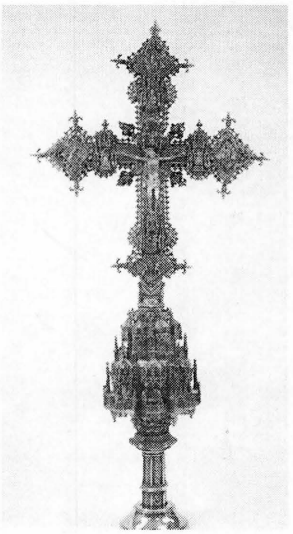

図32 ペドロ・デ・リバデロ作《聖体顕示台》1510年頃のムシエンテスの聖体行列用、バリャドリード

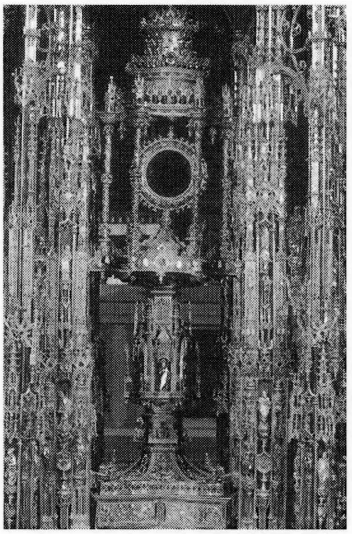

図33 Jaume Aymerich作《聖体顕示台》トレド大聖堂：イサベル女王による改修

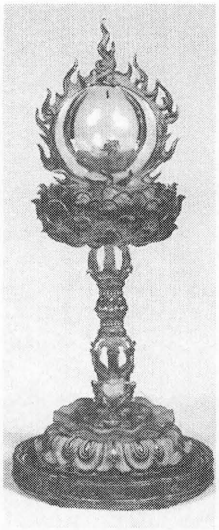

図34 金銅密観宝珠形舎利容器　奈良西大寺：舎利をおさめたガラス部も含めた形体が聖体顕示台に類似

在の四天王寺の五重塔には、一般人の位牌が廻り階段にそって安置されている。一方西洋でもフェリペ二世建造のエル・エスコリアルは、父カルロス一世が宮殿と教会を一体化させたユステ修道院をモデルとし、父は遺言でスペイン歴代王の霊廟があるレオンの聖イシドーロ教会、グアダルーペ修道院、ポブレー修道院やグラナダ王室礼拝堂に倣いハプスブルク王家のパンテオンの造営を願った。息子はこれを叶え聖堂の祭壇の地下に父カルロスの遺骨を納め、歴代の霊廟とした[53]（図35）。勿論ローマのサン・ピエトロ大聖堂の地下には聖ペテロの墓がある。宣教師がこれを信長に語ったという資料は発見されていないが、話した可能性は否定できない。信長もこれにならって自分の遺骨を安置するための宝塔の設置を発想したと考えられなくもない。平井氏は、この宝塔を仏舎利塔ではなく、『法華経』に典拠する多宝如来が出現させた宝塔であると解すると、本来は釈迦賛嘆の装置であった宝塔を信長が地階に安置することで、釈迦に対する自己の優越性を演出する装置に転換しながら、宝塔が「従地踊出」という経典にも矛盾しない、巧妙な自己神格化の演出が見えてくるとしている[54]。フロイスが信長の神格化を察知し、盆山を自分の化身・ご神体として礼拝させたとしているが[55]、信長の本心は盆山ではなく、将来自らの遺骨を安置する宝塔にあったという可能性はないのだろうか。

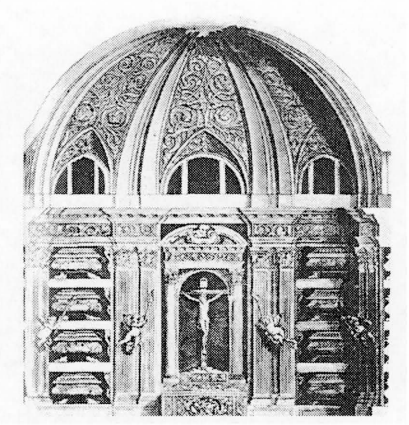

図35　エル・エスコリアル宮殿の地下のパンテオン

内藤氏は『天守指図』の宝塔を屋根は方形で亀腹をもった胴筒とし、愛知県稲沢市の性海寺宝塔に近いとした。これと安土城に招かれ内部を見学した家康の日光東照宮の墓（図36）が酷似している。この家康の墓は、宝塔のルーツのストゥーパが、元来偉人・聖人の遺骨を納めるものだという原点回帰の結果なのであろうか。それとも白河上皇等の先例にならったかもしれない信長を真似たものだろうか。そして、エル・エスコリアル内の聖堂の聖体顕示台を納めた聖体顕示台塔（図37）やミラノで一五六九年着工されたペレグリーノ・ティバルディ設計のイエズス会サン・フェデレ教会の聖体顕示台塔は、宝塔に形体が似ている（図38）。これもさらに示唆的である。安土城の心礎の位置にある幅約六十センチ、深さ約一メートルの穴から発見された壺の破片を、内藤晶氏は舎利容器の存在を推定してもよいとしている。以上から宝塔の埋納品をふくめ

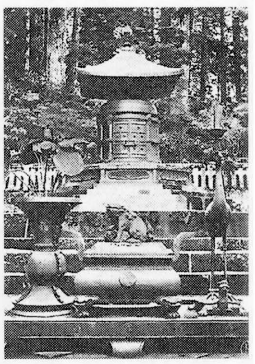

図36　日光東照宮の家康の墓

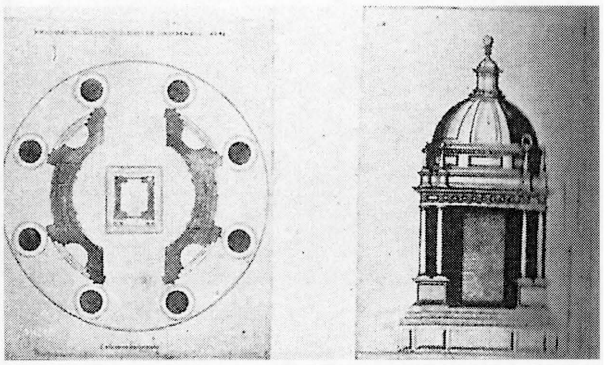

図37　エル・エスコリアル宮殿の教会の聖体顕示台塔

て『天守指図』の宝塔の存在についても多角的にさらに考察できる可能性はあるのではないだろうか。



図38　ミラノのサン・フェデーレ教会の聖体顕示台塔

六．信長の南蛮趣味の政治利用と文化交流

信長は都で馬揃えを挙行し、自らの権力の一大示威行動をした際に、真紅のビロードの南蛮担ぎ椅子に座ってみせた。この例で明らかなように信長は南蛮好きで、またそれを自分の権威づけに利用した。信長は西洋建築の情報を知らないまま建設した岐阜城を宣教師にみせる際に、西洋やインドで見た他の宮殿に比べて見劣りするかもしれないと躊躇した[56]。しかし、その十余年後の安土城の出来栄えは、西洋の建築物に比肩できると自負し、ヴァリニャーノを案内し西洋へ自らの権力を誇示するためにも《安土山図屏風》を持たせた。当時の文化交流と情報伝達の速さを示す一つの例がある。《メキシコ・シティの副王宮殿図屏風》（図39）は、一六六〇年作油絵四枚パネル屏風である。ベイリーによると、難破したロドリゴ・デ・ビベロの献上品の返礼に家康が、日本からヌエバ・エスパニャの副王・ルイス・デ・ベラスコに贈った屏風に触発され描かれたものである。洛中洛外図屏風のように金色の雲を飛ばして、螺鈿の技法を真似て真珠の母貝を嵌めこんでいる。そこに日本人の移住者画家の存在を研究者たちは指摘している[57]。これを見ると、我々の想像を超える速さで深い文化交流があり、進取の気性に富んだメキシコの依頼主と画家が存在したことが分かる。こうした状況下にある信長が西洋建築の要素を盛り込まないとは考えにくい。しかし、その後の城郭建築には吹き抜けも宝塔もない。南化玄興の「安土山ノ記」に、「唯流出府君之一胸禁」と、すべての新発想は信長から出たものであると記しているが、このような深い政治構想を秘めた独創的な信長の発想をだれも理解できなかったからではないだろうか。

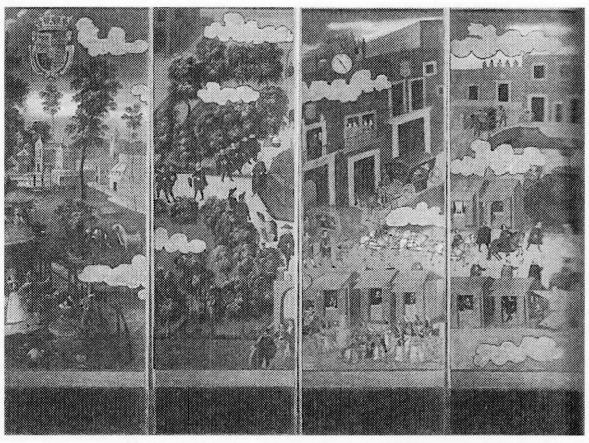

図39　《メキシコ・シティの副王宮殿図屏風》1660年油絵200x300cmの部分　Rodrigo Rivero Lake Antiques International, Mexico City

結語

以上を総合すると、信長は、都の文化及び西洋世界との出会いを契機として、見る人に限りない感動と、造営主に対しての畏敬の念を喚起する壮麗な建築物の持つ力に気づいていった。策彦との交流から多くを学んだ。古代から新しい政治構想を創出した権力者は、中国の阿育王塔信仰の流れにある五重塔を、国家権力と鎮護国家の象徴として伽藍のなかでも遠くからひと目で分かるランドマークとして造営した。彼らと同じように新しい時代を切り拓こうとしていた信長が、都や奈良に入ると一番先に目に入る五重塔を、天下布武・天下静謐の象徴として安土城の基本構想の支柱に選択したと考えられる。そして宣教師が見せた西洋の壮大な城郭の絵や情報から、高い塔が城郭になり居住空間として王の宮殿にもなること、西洋の城郭が吹き放ちの中庭を配した構造であり、中庭を中心に四面に部屋を配して積み上げれば政庁と居住空間に必要な部屋が五重塔におさまることを認識した。地下には蔵も設置した。そして築城地として実在の琵琶湖を選択することで、琵琶湖を西湖にそして五重塔を遠寺に見立て、室町将軍が絵画で権威の象徴として描かせた理想郷蕭々八景を現実のものにした。そして、将軍御所等の主要な部屋を垂直に高く積み上げた安土城を築城して、明皇帝に日本国王と称せしめた将軍義満を凌駕したことを示威し、また天皇家、摂関家そして足利将軍家とも異なる新たな権力形体を志向した信長の政治構想を視覚化したのではないか。そこに五重塔の国家護持という本来の機能である舎利殿として、法華経のような法舎利、そして聖体を含む舎利を意識しながら、天皇の廟としての塔に倣い、ひょっとすると西洋の聖人や国王にも倣い、将来自らの遺骨をも納める宝塔を地下に設置し天下布武の象徴にしたのではないか。そして自信をもって西洋に屏風の形で披露した。日本語ですでに吹き抜けの概念があり、しかも構造的に可能であれば、それにふさわしい荘厳な吹き抜け空間を信長が採用した可能性も否定できず、吹き抜けと宝塔の存在の可能性は再考察する余地があるのではないだろうか。

註

（1）内藤晶『復元安土城』講談社学術文庫二〇〇六年、および内藤晶「安土城の研究」（上）（下）『国華』九八七・九八八号、昭和五十一年、（上）六八ページ。

（2）平井良直「安土城天主六階障壁画に関する『天守指図』の整合性について」中世史研究会会報『遥かなる中世』No.13、東大文学部国史学研究室刊所収一九九四年　四四ページ、および同「安土城天主5階の空間構成に関する一試論」『日本歴史』五七〇号　一九九五年　一八―三五頁。

（3）宮上茂隆「安土城天主の復元とその史料に就いて」（上）（下）『国華』第九九八号と第九九九号、一九七七年。この点については（上）七頁と（下）の一八頁、二〇頁にあり。

（4）Yarza Luaces, Joaquín: *Los Reyes Católicos. Paisaje artistitico de una monarquía*, Editorial Nerea, Madrid, 1993, pp.63-66.

（5）小山真由美「「南蛮の箱」と「枢機卿の帽子」」電子版『SPAZIO』No.63、二〇〇四年。

（6）内藤　前掲論文・上、九九頁。

（7）南化玄興の「安土山ノ記」は妙心寺隣華院蔵の『特賜定慧円明南化国師虚白録』所収。解釈は、愛知文教大学地域連携センター文庫所有の篠田徹氏による読下し文を、同センターの唐松健夫氏からご送付頂いたものと、横浜翠嵐

高等学校教諭・中西亮太氏の読下し文とご助言から筆者の責任で行った。唐松氏および中西氏には謝意を表したい。

（8）内藤晶『国華』（上）前掲書六八頁、および内藤晶『復元安土城』講談社学術文庫　二〇〇六年、九七頁。

（9）濱島正士「日本の塔の組み上げ法」上田篤編『五重塔はなぜ倒れないか』新潮社二〇〇八所収、一一九頁、二〇五頁。

（10）千田嘉博『信長の城』（岩波新書二〇一三年）の二五八頁では、安土城の天主は重層の大型櫓から、藤田達生『信長革命』（角川選書　平成二十二年）の一四四頁では、義輝・義昭の将軍御所からそれぞれ発展したとしている。

（11）アビラ・ヒロン『日本王国記　大航海時代叢書XI』（佐久間正・会田由訳）岩波書店　一九六五年、一七一頁。河内将芳『信長が見た戦国京都』洋泉社歴史新書　二〇一〇年。

（12）牧田諦亮『策彦入明記の研究』（上）仏教研究所一九五五年、および（下）法蔵館一九五九年。

（13）宮上の前掲書（上）二五頁。

（14）平井の前掲書『遥かなる中世』四四頁。

（15）谷口耕生「聖地寧波をめぐる信仰と美術」『聖地・寧波』二〇〇九年奈良国立博物館、八―一六頁、および内藤栄「阿育王信仰と日本」同書の二四五―二四七頁。

（16）牧田前掲書上巻二七七頁、三七八頁、下巻六五―六六頁、三八六頁。

（17）谷口、内藤栄の前掲書

（18）京都国立博物館編集『狩野永徳』毎日新聞社・NHK・NHKきんきメディアプラン、平成十九年一三頁、二四九―二五〇頁。

（19）牧田・下巻一一二頁、宮上茂隆解説『金閣寺・銀閣寺・日本名建築写真選集十一』新潮社　平成四年一一七頁、林屋辰三郎『日本の歴史十二　天下一統』中央公論社一九七四年、米原正義「茶の湯」岡本良一編『織田信長事典』新人物往来社一九九一年三二九頁、今谷明『室町の王権』中央公論社一九九三年一四〇頁、五二頁、小川剛生『足利義満・公武に君臨した室町将軍』中央公論新社二〇一二年二一六―二三五頁。

（20）今谷明『京都・一五四七年　上杉本洛中洛外図の謎を解く』平凡社二〇〇三年、小島道裕『描かれた戦国の京都　洛中洛外図を読む』吉川弘文館二〇〇九年一四三頁。

（21）冨島義幸「付章Ⅳ法勝寺八角九重塔の復元について」『京都市内遺跡発掘調査報告』京都市文化市民局　平成二十二年度一九四―二〇九頁、同「八角九重の幻の塔」上田篤編『五重塔はなぜ倒れないか』新潮選書二〇〇八年一二五―一四六頁、同『平等院鳳凰堂』吉川弘文館二〇一〇年、同『密教空間史論』法蔵館二〇一一年。

（22）林屋辰三郎『古代国家の解体』東京大学出版会　一九五九年三八―三九頁、および林屋辰三郎『日本―歴史と文化』平凡社　昭和四十二年。

（23）García Gutiérrez, Fernando: *MOMOYAMA. LA Edad de Oro del Arte Japonés1573-1615*（Catálogo de la Exposición, el Ministerio de Cultura), Ambito Servicios Editoriales S.A. Madrid, 1994 p.35, pp.146-147. p.123.

（24）ゲオルク・シュールハンマー『イエズス会宣教師が見た日本の神々』（安田一郎訳）青土社二〇〇七年六三―六四頁、五一―五二頁、七七―七九頁。

（25）若桑みどり『クワトロ・ラガッツイ・天正少年使節と世界帝国』集英社二〇〇五年　三一四―三一五頁。

（26）一五七五年にフェリペ二世のお抱え地理学者になったアントワープ生まれのA・オルテリウスのTeatrum Orbis Terrarum（世界地図帳）とブラウン（George Braun）とホーヘンベルグ（Joris Hoefnagel）によるCivitatesOrbisTerrarum（世界都市図一覧帳三巻・一五七二年ケルンで出版）。

（27）サントリー美術館・神戸市立博物館・日本経済新聞社編集『南蛮美術の光と影・泰西王侯騎馬図屏風の謎』日本経済新聞社　二〇一一―二〇一二年一一六―一一七頁、二二五―二二六頁。

（28）宮崎政勝『ザビエルの海』原書房　二〇〇七年一一一頁。

(29) 一五九九年二月二十五日付け長崎発・イエズス会総長宛の書簡。高瀬弘一郎『キリシタン時研究』岩波書店一九七七年一三三―一三四頁、一五〇―一五八頁。

(30) 厳慈愷「中国の塔には心柱はなかった」前掲書上田編『五重塔』三一―五四頁、および濱島一一九頁。

(31) フロイス『日本史三』（松田毅一・川崎桃太訳）中央公論社　昭和五十三年二五四頁、二八〇―二八二頁。

(32) 林屋辰三郎『京都』岩波新書　二〇〇五年一〇三―一〇五頁、三八頁。

(33) 内藤・『国華』上六九頁。

(34) 内藤の前掲書『復元安土城』一五四頁。

(35) González J.J.Martín: *Historia de la Arquitectura, Editorial Gredos*, S.A. 1973, pp.250-251.Benítez, Fray Jesús Miguel: *Madrigal de las Altas Torres*; Angulo Iñiguez, Diego: *Historia del Arte, Tomo I*, Diestribuidor E.I.S.A, 1973, p.392.

(36) 藤森照信・前橋重二『五重塔入門』新潮社　二〇一二年一一九頁。

(37) ヴァリニャーノ『日本巡察記』松田毅一他訳　平凡社一九九五年、三四四頁。

(38) 神聖ローマ帝国皇帝にしてスペイン国王であるカルロス一世の寵臣から聖職者に転じた。

(39) 例えばスペインのバリャドリードでも、イギリスのイエズス会士、ロバート・パーソンズがフェリペ二世の保護のもと一五九〇年にサン・アルバーノ教会を建てたのがこの様式で、その目的は、当時イギリスのヘンリー八世が、教皇の同意なしにカトリック両王の四女カタリーナとの離婚を強行し、教皇権から独立して英国国教会を創設したため、ヘンリー八世とさらにはプロテスタントと戦うための司祭を養成するためであった。
Giovanni Sale, S.J:The design of the Gesù in Rome: A difficult collaboration: *The Jesuits and the Arts*, edited by John W.O'Malley , S.J. and Gauvin Alexander Bailey, Saint Joseph's University Press Philadelphia2005 pp.47-62; ハインリッヒ・ヴェルフリン『ルネサンスとバロック』（上松祐二訳）中央公論美術出版一九九三年七七―九七頁、佐藤達雄『図説西洋建築の歴史』河出書房新社二〇〇五年、宮下規久朗『イタリア・バロック―美術と建築』山川出版　二〇〇六年。

(40) フェリペ二世が一五五七年に仏軍にサン・カンタンで大勝利をおさめた日が、焼き網の上で殉死した聖ロレンソの祝日であったため、これを記念した焼き網が平面図の基本となった。修道院と王宮を合体したのは、カトリック両王がアビラでしたことにも倣った。Sigüenza, Fray José: *La Fundación del Monasterio de El Escorial*, Aguilar, S.A.1988; Bozal, Valeriano: *Historia del Arte en España Tomo I*, Ediciones Istmo, 1973, pp.255-260; González 前掲書 pp.293-299.

(41) Yarza Luaces J.: *Los Reyes Católicos. Paisaje artístico de una monarquía*, p.65.

(42) 立花京子『信長と十字架』集英社二〇〇四年　一六四頁。

(43) 松田毅一「解題」ヴァリニャーノ『日本巡察記』二九一―二九三頁、三四八頁、宮元健次「日本イエズス会士礼法指針第七章について」日本建築学会計画系論文報告集、四二三号　p.124; Valignano, A: *Sumario de las cosas de Japón*.Editado por J.L.Álvarez Taladriz, Monumenta Nipponica Monographs.Tokio:Sophia University, 1954;. ヴァリニャーノ『日本の風習と形儀に関する注意と助言』の一五六項に日本での教会建築のあり方を、正面間口より礼拝堂の奥行きを深くし、両側に座敷を設け、必要に応じ扉を開閉し、祈りの場を広く一体化することと書いている。まさにイル・ジェズ教会の特徴そのままである。

(44) 『日本城郭体系十巻』新人物往来社　一九八〇年　二五四―二六〇頁。

(45) García Gutiérrez, Fernando: *La Arquitectura japonesa vista desde Occidente, Japón y Occidente (II)*, Sevilla, Guadalquivir Ediciones 2001, pp.73-77.

(46) シュールハンマー　前掲書六八頁。

(47) 若桑みどり『聖母像の到来』青土社　二〇〇八年一七八―一七九頁。

(48) Yarza Luaces, Joaquín: *Isabel La Católica, Promotora artística*, Edilesa, 2005.

(49) Hara , Yoko:《El castillo de Azuchi y la visualizaciòn de los ideales políticos de Oda Nobunaga》: *Japón y España; acercamientos y desencuentros (siglos XVI y XVII)*, Satori Ediciones, Gijón, 2012, pp.118-119 の拙稿でこれについては指摘したが、それ以前にすでに坂本氏と成澤氏の同様の指摘があり、成澤氏は南蛮船が聖体を日本に運ぶ役割をもっていたとすることを後に知った。(坂本満「異文化に対する表現—異国趣味の諸問題」『南蛮屏風』三〇五—三一二頁、成澤勝嗣「近世初期風俗画としての南蛮屏風—その誕生から変貌まで—」二九四—三〇四頁、坂本満編『南蛮屏風美術集成』中央公論美術出版社二〇〇八年)。

(50) 内藤栄「舎利と宝珠」『日本の美術』No.539 至文堂 二〇一一年二四頁。

(51) 田辺理「インド古代美術にみられるナーガ王の舎利容器供養と仏塔供養」『美術史学会』一七八、Vol.LXIV No.2、平成二十七年三月。

(52) 山岸常人「廟としての塔」『朝日百科日本の国宝別冊　国宝と歴史の旅八　塔・形・意味・技術』朝日新聞社二〇〇〇年一九—二〇頁、および冨島義幸と内藤栄の前掲書。

(53) Germán Bleiberg 監修 : *Diccionario de Historia de España 1*, Revista de Occidente 1968, pp.1288-1291;Viñayo González, Antonio: *Real Colegiata de San Isidoro*, Edileza, 1998.

(54) 平井良直の前掲載の二番目の論文三一頁。また藤田達生は『信長革命』(角川書店平成二十二年、一一八頁)で、総見寺が拝殿で、天主が本尊という位置づけにもなり、安土城自体に聖地としての意味をもたせようとしたのかという説を出している。

(55) フロイス前掲書五巻一三二—一三六頁、および内藤晶の前掲書『復元安土城』三〇〇—三〇四頁。

(56) フロイス前掲書四巻二一六頁。

(57) Bailey, Gauvin Alexander, "Asia in the Arts of Colonial Latin America" *The Arts in Latin America 1492-1820*, organized by Joseph J. Rishel with Suzanne Stratton-Pruitt, Philadelphia Museum of Art, Antiguo Colegio de San Ildefonso, México City, Los Angeles County Museum of Art, 2007, p.64, pp.57-68.

〔挿図出典〕

挿図1、「安土町立城郭資料館・館内ごあんない」

挿図2、3、4　内藤晶『国華』九八七・九八八号昭和五十一年

挿図5、6　『聖地寧波』展覧会図録　奈良国立博物館　二〇〇九年

挿図7、8　長谷川周『中国仏塔紀行』東方出版　二〇〇六年

挿図9、10、11　『京都市内遺跡発掘調査報告』京都市文化市民局　平成二十二年

挿図12、31　『南蛮美術の光と影』展覧会図録　神戸市立博物館二〇一二年

挿図13　上田篤編『五重塔はなぜ倒れないか』新潮社二〇〇八年

挿図14　内藤晶監修『復元安土城天主—南蛮風唐様デザイン』(財)安土町文芸の郷振興事業団　安土城天主信長の館一九九九年

挿図15、16、17、18、19　筆者撮影

挿図20　*Junta de Castilla y León*, Editorial Everest, S.A.1988.

挿図21、22、29、32、33　J.Yarza: *Los Reyes Católicos*, Editorial Nerea 1993.

挿図23　*Castillos de España*, Editorial Escudo de Oro, 1982.

挿図24　太田静六『スペイン・ポルトガルの古城』吉川弘文館一九九一年。

挿図25　Benítez, Fray Jesús Miguel: *Madrigal de las Altas Torres*, Edilesa, 1998.

挿図26　『金閣寺・銀閣寺　日本名建築写真選集』第十一巻　新潮社 平成四年

挿図27、38　John W.O' Malley: *The Jesuits and the Arts*, Saint Joseph's University Press, Philadelphia, 2005

挿図28、35、37　Siguenza, Fray José: *La Fundación del Monasterio de El Escorial*, Aguilar, S.A.1988.

挿図30　若桑みどり『聖母像の到来』青土社二〇〇八年。

挿図34　『日本の美術』№五三九、至文堂二〇一一年。

挿図36　シュールハンマー『イエズス会が見た日本の神々』青土社二〇〇七年。

挿図39　*The Arts in Latin America 1492-1820* organized by Joseph J.Rishel with Suzanne Stratton-Pruitt Philadelphia Museum of Art, Antiguo Colegio de San Ildefonso, México City, Los Angeles County Museum of Art, 2007

原陽子（はら・ようこ）
神戸市外国語大学院外国語学研究科イスパニア語学専攻修士課程修了
元姫路独協大学特別教授